

2024/4/21

ルカの福音書 講解メッセージ②

『ルカの福音書 1章 21-47節 魂と精神は別もの』

神は御使いを通して、ザカリヤに男の子が生まれるという告知をしましたが、彼は信じることができませんでした。そのため、神は、彼に口がきけなくなるというしるしを与えました。これは、罰ではありません。信じることができるようにという励ましです。その後、ザカリヤはどうなったのでしょうか。

「人々はザカリヤを待っていたが、神殿であまり暇取るので不思議に思った。やがて彼は出て来たが、人々に話すことができなかった。それで、彼は神殿で幻を見たのだとわかった。ザカリヤは、彼らに合図を続けるだけで、口がきけないままであった。やがて、務めの期間が終わったので、彼は自分の家に帰った。その後、妻エリサベツはみごもり、五か月の間引きこもって、こう言った。「主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかけて、今、私をこのようにしてくださいました。」(ルカ 1:21-25)

神が御使いを通してザカリヤに語ったことはそのとおりにになりました。ここで、ザカリヤとエリサベツの話はいったん終わり、マリヤの話に移ります。

■ 戸惑い

「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。御使いは、入って来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」(ルカ 1:26-28)

ガブリエルがマリヤを「恵まれた方」と呼んだ理由は、主が共におられるからです。ということは、私たちも主が共におられますから、私たちも「恵まれた方」ということになります。つまり、この言葉は、私たち一人一人にも語られているのです。私た

ちにとって何が恵みか、それは、主が共におられることです。それにまさるものはありません。

「しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。」(ルカ 1:29-31)

主が共におられると言われても私たちには見えません。それで、マリヤは戸惑ってしまったわけです。今も、神が見えないために信じ切ることができず、多くの人が戸惑いを感じています。しかし、神のいのちに支えられていなければ、私たちは存在すらできないのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

イエス様が語っている「私を遣わした方」とは父なる神のことですが、神は三位一体ですから、「イエス・キリストを信じる者」という理解で問題ありません。イエス・キリストを信じる者は永遠のいのちを持っていて、さばきに会うことがなく、死からいのちにうつっていると、イエス様は明確に語っておられます。しかも、これらは完了形で語られていますから、すでに完了したことであって、私たちはすでに永遠のいのちを持っているのです。これが、私たちが受けている恵みです。しかし、マリヤが御使いの言葉に戸惑ったように、それが目に見えないので、私たちも戸惑ってしまうわけです。しかし、このことを信じることができれば、すでに死からいのちに移されているわけですから、死はもはや敵ではなく、天国にそのまま引き上げられるという希望を持つことができます。

永遠のいのちにまさる恵みはありません。見えるところは何の変化もありませんが、神を信じた私たちの内側では、最高の恵みを受け取るという大きな変化があったのです。そして、ガブリエルから告知を受けたマリヤも、見えるところは何の変化もありませんが、神からの恵みをすでに受け取っており、すでに男の子をみごもっているのです。

「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」(ルカ 1:32-33)

当時のイスラエルは、国としてではなく、ユダヤ人としてローマ帝国に統治されていました。ですから、人々は、救い主は、イスラエルが最も栄えていたダビデの王国を復興してくれる方だと期待していたのです。しかし、神が用意したダビデの王国は、目に見える国ではなく、永遠の神の国のことでした。そして、私たちがイエス・キリストを信じた時から、目には見えないけれど、神の国の生活が始まると聖書は教えています。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ 17:20-21)

イエス・キリストを信じている者は、すでに神の国の中にあるのです。これが、「永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移されている」ということです。このことを御使いはマリヤに伝えたのです。イエス・キリストは神の国を治める王であり、イエス・キリストを信じている者はもうその中に入って暮らしているので、死はすでに敵ではないということです。

「そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」(ルカ 1:34-15)

神の子は神です。神が人の姿になって来られたのがイエス・キリストです。ですから、イエス・キリストは神の側面と人の側面の両方を持っています。これは人の理解を超えたところで、つまずきの原因でもあります。このつまずきは、信仰でしか解決することができません。私たち人間の理性には限界があり、どうしても信仰を必要と

しているのです。人は、自分の経験できないことは神に啓示していただくしかなく、その啓示が聖書です。つまり、私たちは聖書を通して、信仰によってのみ神を知ることができるようになってきているのです。

「ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。」（ルカ 1:36-37）

私たちが信じられなければ、神は、信じられるように励ましてくださるお方です。御使いは、マリヤを励ますために、エリサベツという実例を示しました。神は、私たち一人一人に対してそれぞれ個別に励ましてくださいます。

「マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」」（ルカ 1:38-45）

人生の中で幸いなこと、それは、神のことばは必ず実現すると信じ切ることができることです。自分の理性では信じられないことも、信仰によって乗り越えることが大切です。理性には限界があります。神の前にへりくだることが大切です。聖書を読むうえで私たちが間違えがちなことは、自分の理性で納得できるように読もうとすることです。自分に合わせて聖書を読もうとしてはいけません。自分を聖書に合わせなければならないのです。自分の考えを優先させるために、聖書のことばはつまずきになります。つまずきを信じて乗り越えていくことで、神をさらに深く知ることができるようになり、神との距離を縮めることができます。自分の理性の限界を認めず、傲慢でへりくだることができないと神との距離は縮まりません。

■ 魂と精神は別のもの

「マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」(ルカ 1:46-47)

聖書は、「魂」と「霊」を分けています。「魂」は「プシュケー」、「霊」は「プレウーマ」で「精神」を意味します。「魂」と「霊」(精神)は別のものなのです。「魂」とは神のいのちであり、神に属するもので、神と私たちを一つにしようとする運動をしています。一人一人に貸し出されたその神のいのち(魂)がもたらす運動によって、「体」がこの世界からの情報を收拾することで、そこに意識が生じます。この意識が精神(霊)です。多くの人々、「魂」は自分のものだと思っていますがそうではなく、「魂」とは神のいのちであり、その「魂」に支えられて生きているのが人間です。

「あがめ」と訳されている「メガリユノー」は、「大きくする」という意味があります。神に近づけば近づくほど、神の存在は私たちの中で大きくなります。その結果、私たちの霊(精神)は神を喜びたたえるのです。これは、神のいのちに支えられているからであり、神のいのちがなければ、そもそも私たちは存在できません。つまり、神はいつも共におられ、あなたを見捨てることはできないということでもあります。

人間とは、体があり、そこに神のいのちである魂が吹き込まれ、意識が生じたものです。どれが欠けても、人として成立しません。このことが書かれている御言葉をいくつか確認しておきましょう。

「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。」(Iテサロニケ 5:23)

「神である主は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」(イザヤ 63:9)

私たちは、ひとりで生きているわけではありません。神があなたを背負っているか

ら、私たちは生きています。もし、この神を無視し続ければ、最後にはこのいのちを失ってしまいます。そうなることがないように、神は常に御手を差し伸べておられます。私たちはただその御手につかまればよいのです。それが信仰です。私たちは日々神の声を聞いています。自分のものではない心を感じています。それが、神が差し伸べておられる御手です。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです。」

(使徒 17:28)

私たちは、神によって生きています。目には見えず、たとえ神を知らなくても、神のいのちがなければ、人は存在することができません。それが、マリヤの賛歌に表れています。

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」(ルカ 20:38 新共同訳)

すべての人は、神によって生きています。あなたを生かしているのは神であり、神はいつもあなたと共におられます。ですから、まことの平安を手にするために、苦しみ悲しみを神に告白し、神と共に生きていきましょう。心の中で主を大きくし、神に近づいて、平安の中を生きていきましょう。